



夏の県大会で何度も接戦を勝ち抜き、八学光星の選手たちは自信を深めたが、試合展開には不満が残った。仲井監督は「打てなかったから接戦になっちゃったが、本当はそうはなりたくなかった」と本音を漏らした。

八工大一との決勝戦では15安打と「光星らしさ」を見せたものの、大会を通して打線は低調。私立の強豪校との対戦が続いたとはいえ、全5試合のチーム打率は2割9分2厘にとどまった。4割1分9厘だった春の大会と比べると、物足りなさが目立った。

「打ちたい」と気持ち以前のめりになり、バツティングの要である体の軸がぶれてしまっていたと仲井監督は分析。本来の打撃力を取り戻すため、体の軸を意識した練習で立て直しを急ぐ。選

全員野球で大舞台へ 不調の打線 再起なるか



手たちも口々に「甲子園は総力戦で優勝までこぎつけない」と再起を誓う。対的なエースやバッター光星打線が本領をなか「はいない」(仲井監督)なか発揮しない中、今夏が、選手層の厚みが強み。

試合前の練習の様子を見れば「打の光星」を見せつけた。現チームは「絶対先発メンバーや打順を入れ替え、その日のベストのチームを組んでいた」という。

投手陣も豊富で6投手がベンチ入り。各試合で小刻みな継投策を敷き、決勝では全投手が登板して相手の反撃を振り切った。再三のピンチを落着いた投球で締めた主戦洗平歩や、弘前東や八工大一との接戦で安定した投球を見せた左腕渡部らが、一皮むけた姿を見せた。

現在、野球部員は光星史上最多の171人。みんなが「一丸となり、文字通りの全員野球で大舞台に臨む。7日、創志学園(岡山)との初戦に向け、洗平歩は「まずは一戦一戦を全力で戦つ」と誓った。「一戦必勝」の先には、全国制覇が待っている。(野村遥)

「打の光星」の復活に向け、打撃練習に励む八学光星ナインは7月28日、八戸市美保野の同校グラウンド